

とともに多発性関節痛が生じ、以後全身倦怠感、多彩な皮疹、胸水貯留が認められた。検査所見では血沈亢進、CRP 陽性が認められ、末梢血中の好酸球は $1,783/\text{mm}^3$ と増加していた。プレドニゾン 5mg を用いて経過が観察されたが、皮疹が増悪し、皮膚生検の結果、好酸球が真皮、特に小血管周囲につよく浸潤していたが、血管炎の所見は認められなかった。本例では以上のように DECD が疑われるが、確定診断のためには寄生虫疾患、血液疾患等の除外、リンパ節生検、骨髓生検等の精査をすすめなければならない。

5. Basedow 病甲状腺の免疫組織化学的検討

(病院病理科) 相羽 元彦・平山 章
(内分泌外科) 山下 共行

Basedow 病甲状腺の濾胞形態を F・P・R の 3 pattern に分け、colloid 並びに濾胞上皮中の thyroglobulin (TG)・thyroxin (T_4) の局在を免疫組織化学的に観察した。細胞質内に T_4 が染色される細胞は F pattern において典型的に見られ、多くは TG も陽性であった。P pattern を示す症例の中に、主濾胞から budding による tubular/microfollicular の増殖、さらに TG・ T_4 に様々な染色性を示す成熟に至る移行像を見る一方、主濾胞を構成する上皮は、多く円柱上皮を保ち、TG (—) ~ (+), T_4 (—) の傾向を維持する等特徴的な態度を示した。後者も最終的には成熟濾胞上皮の形態をとり得た。Basedow 病甲状腺の組織像は、F・P・R pattern のうちの一種あるいは複数種類の混在という形で示され、内分泌学的に adenylate cyclase 活性を刺激する抗体、細胞増殖を刺激する抗体のどちらか、又は両方を有する症例が報告されている事と対応する可能性がある。F・P・R pattern の解析は、癌・腺腫・腺腫様甲状腺腫等の理解に有用である。

6. Friction melanosis にみとめられた真皮内アミロイド線維

(皮膚科) 水口 美知・肥田野 信

近年、鎖骨部、背部の骨直上に特異な色素沈着を呈する疾患の報告が全国的に相次いでいる。その原因として、ナイロンタオルなどによる長期の刺激が指摘され、friction melanosis と呼んでい

る。通常丘疹は伴わず、組織にアミロイド沈着はないとされている。最近我々は丘疹を伴う friction melanosis、又はそれに類似した症例を数例経験し、組織でアミロイド沈着を認めた。このため、皮膚限局性アミロイド症、特に斑状アミロイド症との鑑別が問題となってきた。今回、いくつかの症例の光顕、電顕写真を供覧し、friction melanosis におけるアミロイド沈着の機序について考察した。

7. 慢性関節リウマチ (RA) に IBL 様 T 細胞リンパ腫を合併した 1 例

(第四内科)

西 真理子・西川 恵・杉野 信博
(リウマチ痛風センター)

谷口 敦夫・西岡久寿樹

慢性関節リウマチ(RA)に、IBL 様 T 細胞リンパ腫を合併した症例を経験したので報告する。

症例は80歳女性、発熱を主訴に入院。臨床的に、全身性リンパ節腫脹、肝腫、発疹、多クローン性高ガンマグロブリン血症を認め、リンパ節生検にて、特徴的な病理所見、すなわち、リンパ濾胞の消失、血管の増生、immunoblast や pale cell の増殖を認めた。また、免疫学的検索により、増殖している細胞は、T細胞のマーカーをもつことより、IBL 様 T 細胞リンパ腫と診断した。治療として、プレドニン投与を行なったが、あまり効果は認められず、入院後、約 1 カ月の経過で死亡した。

多クローン性高ガンマグロブリン血症を伴う IBL 様 T 細胞リンパ腫が、自己免疫産生亢進を病態としている RA に合併しているという点で興味ある症例であった。

8. 腎疾患 (小児) における組織内 fibronectin の動態について

(腎小児科)

長田 道夫・川口 洋・伊藤 克己

Fibronectin (FN) は、MW 45万の結合組織由来の α_2 -glycoprotein である。今回、小児腎疾患における FN の組織内分布様式、増量の程度と光顕所見、蛋白尿、腎機能を比較検討した。その結果、① FN はメサンジウム細胞の増殖性変化と平行し、増量、分布する傾向がある。②メサンジウム